

藤村全集

第五卷

筑摩書房版

藤村全集第五卷

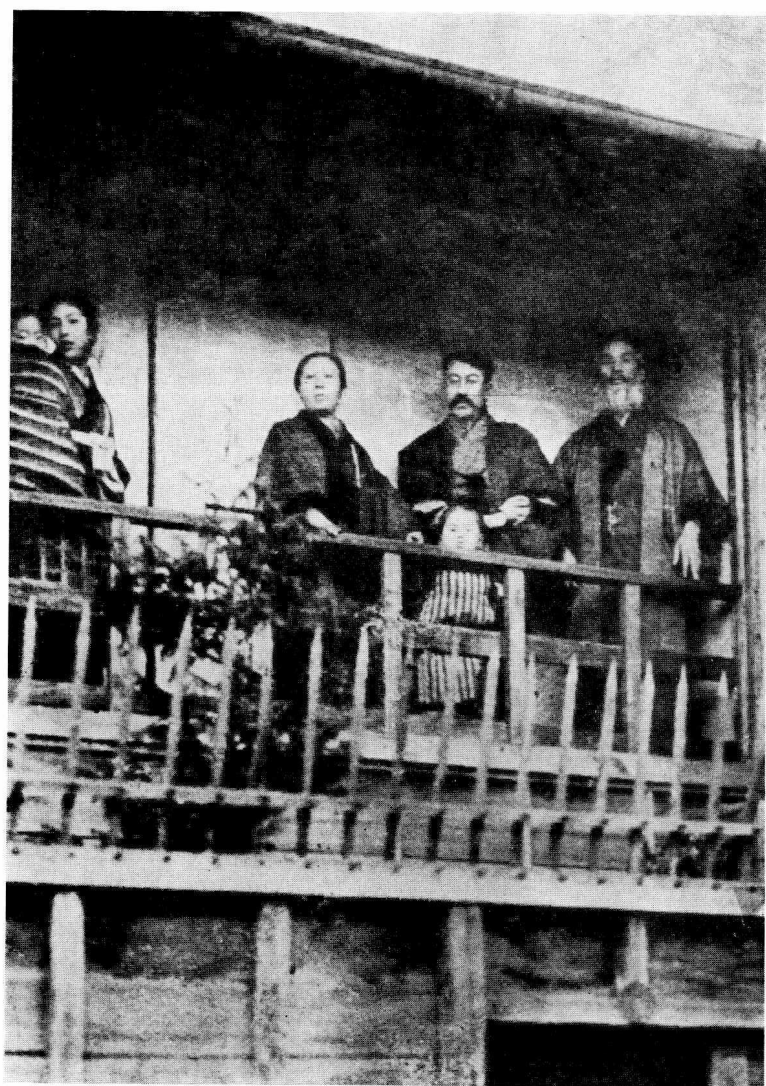
昭和四十二年三月十日發行

著者 島崎藤村

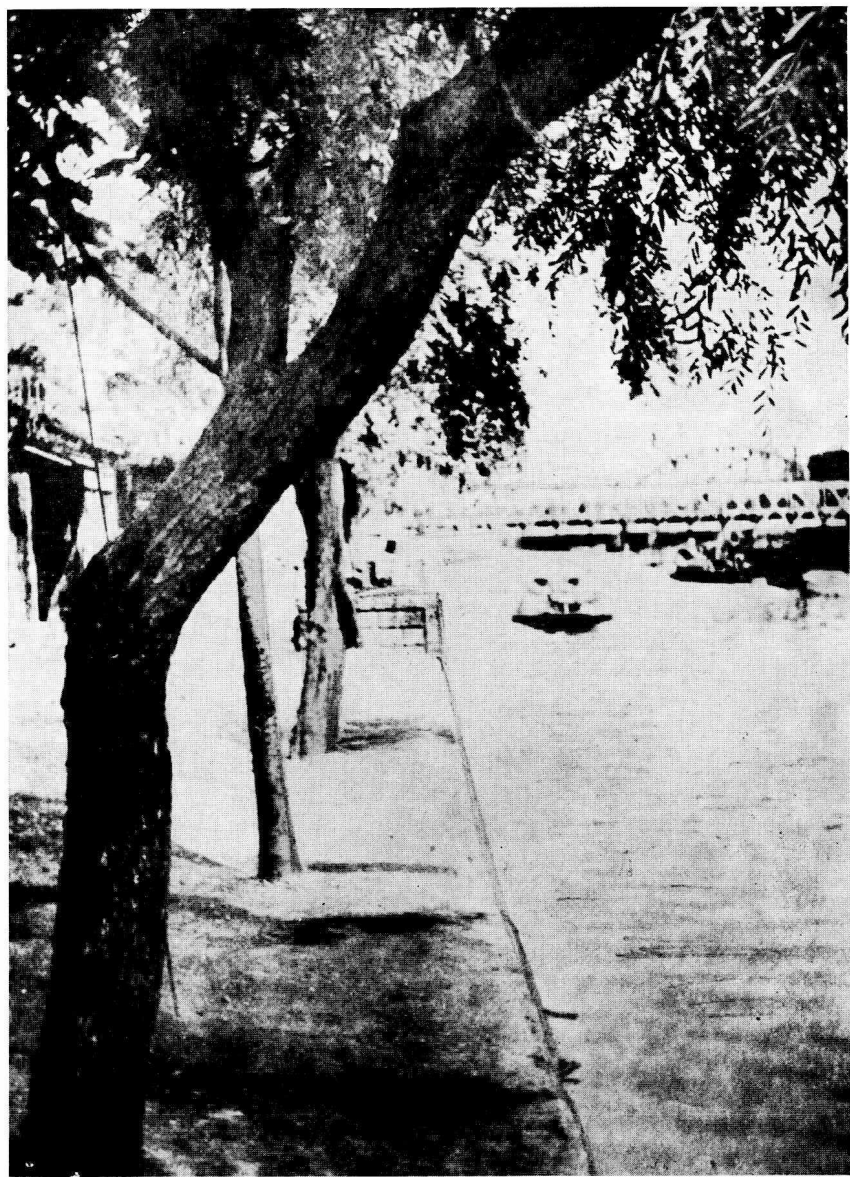
發行者 竹之内靜雄

發行所

東京都千代田區神田小川町二ノ八
株式會社 筑摩書房
電話 東京例一七六五一（代表）
振替口座 東京四一二三番



新片町の家の上階にて
秦夫妻とともに
長男楠雄(藤村の前)、二男鶏二(左端)の顔も見える。



神田川の岸（兩國方面を望む）

第五卷 目次

千曲川のスケッチ	一
----------	---

序	三
---	---

其 一

學生の家	七
鐵砲蟲	九
烏帽子山麓の牧場	一〇

其 二

青麥の熟する時	七
少年の群	八
麥 畠	九
古城の初夏	三

其三

山莊	元
毒消賣の女	三
銀馬鹿	三
祭の前夜	三
十三日の祇園	五
後の祭	六

其四

中棚	四
檜の樹蔭	四

其五

山の温泉	四
學窓の一	五
學窓の二	五

田舎牧師		五
九月の田圃道		五
山中生活		五
山番		五

其六

秋の修學旅行		三
甲州街道		三
山村の一夜		三
高原の上		六

其七

落葉の一		三
落葉の二		三
落葉の三		三
炬燵話		六
小六月		七

小春の岡邊		ㄱ
農夫の生活		ㅎ
收穫		ㄷ
巡禮の歌		ㅅ

其 八

一ぜんめし		ㄹ
松林の奥		ㅇ
深山の燈影		ㄴ
山の上の朝飯		ㅈ

其 九

雪國のクリスマス		ㅍ
長野測候所		ㅂ
鐵道草		ㅅ
屠牛の一		ㅇ
屠牛の二		ㅈ

屠牛の三		110
屠牛の四		111

其 十

千曲川に沿ふて		117
川 船		119
雪の海		121
愛のしるし		123
山の上へ		123

其十一

山に住む人々の一		127
山に住む人々の二		129
山に住む人々の三		131
柳田茂十郎		133
小作人の家		133

其十二

路傍の雜草……………一四

學生の死……………一五

暖い雨……………一六

北山の狼、其他……………一七

御辭儀……………一八

春の先驅……………一九

星……………二〇

第一の花……………二〇

山上の春……………二一

眼鏡……………二五

微風……………二七

出發……………二九

足袋	二七
岩石の間	二四
突貫	二六
死の床	二五
燈火	三〇
犬	三三
沈黙	三九
無言の人	三四
柳橋スケッチ	三九
一、日光	三九
二、柳並木	三五
三、柳橋	三八
四、神田川の岸	三六
五、海岸	三六

幼き日……………三六

櫻の實の熟する時……………四三

解題……………五五

校異……………六五

語註……………六三

千曲川のスケッチ

序

敬愛する吉村さん——樹さん——私は今、序にかへて君に宛てた一文を斯の書のはじめに記すにつけても、矢張り呼び慣れたやうに君の親しい名を呼びたい。私は多年心掛けて君に呈したいと思つて居たその山上生活の記念を漸く今纏めることが出来た。

樹さん、君と私との縁故も深く久しい。私は君の生れない前から君の家にまだ少年の身を托して、君が生れてからは幼い時の君を抱き、君をわが背に乗せて歩きました。君が日本橋久松町の小學校へ通はれる頃は、私は白金の明治學院へ通つた。君と私とは殆んど兄弟のやうにして成長して來た。私が木會の姉の家に一夏を送つた時には君をも伴つた。その時がたしか君に取つての初旅であつたと覺えて居る。私は信州の小諸で家を持つやうに成つてから、二夏ほどあの山の上で妻と共に君を迎へた。その時の君は早や中學を卒へようとするほどの立派な青年であつた。君は一夏はお父さんを伴つて來られ、一夏は君獨りで來られた。斯の書の中にある小諸城址の附近、中棚温泉、淺間一帯の傾斜の地などは君の記憶にも親しいものがあらうと思ふ。私は序のかはりとしてこれを君に宛てるばかりでなく、斯の書の全部を君に宛てゝ書いた。山の上に住んだ時の私からまだ中學の制服を着けて居た頃の君へ。これが私には一番自然なことで、又たあの當時の生活の一番好い記念に成るやうな心地がする。

『もつと自分を新鮮に、そして簡素にすることはないか。』

これは私が都會の空氣の中から脱け出して、あの山國へ行つた時の心であつた。私は信州の百姓の中へ行つて種々なことを學んだ。田舎教師としての私は小諸義塾で町の商人や舊士族やそれから百姓の子弟を教へるのが勤めで

あつたけれども、一方から言へば私は學校の小使からも生徒の父兄からも學んだ。到頭七年の長い月日をあの山の上で送つた。私の心は詩から小説の形式を擇ぶやうに成つた。斯の書の主なる土臺と成つたものは三四年間ばかり地方に黙して居た時の印象である。

樹さん、君のお父さんも最早居ない人だし、私の妻も居ない。私が山から下りて來てから今日の月日は君や私の生活のさまを變へた。しかし七年間の小諸生活は私に取つて一生忘れることの出来ないものだ。今でも私は千曲川の川上から川下までを生々と眼の前に見ることが出来る。あの淺間の麓の岩石の多い傾斜のところに身を置くやうな氣がする。あの土のにほひを嗅ぐやうな氣がする。私がつぎ／＼に公けにした『破戒』、『綠葉集』、それから『藤村集』と『家』の一部、最近の短篇など、私の書いたものをよく讀んで居て呉れる君は何程私があゝの山の上から深い感化を受けたかを知らるゝであらうと思ふ。斯のスケッチの中で知友神津猛君が住む山村の附近を君に紹介しなかつたのは遺憾である。私はこれまで特に若い讀者のために書いたことも無かつたが、斯の書はいくらかそんな積りで著した。寂しく地方に住む人達のためにも、斯の書がいくらかの慰めに成らばなぞとも思ふ。

大正元年冬

藤 村